

## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

## Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	鉱夫の言葉 : <<Glückauf>>の文化史的側面
Sub Title	Ein bergmännisches Wort : Die kulturgeschichtliche Seite von ‚Glückauf‘
Author	柴田, 陽弘(Shibata, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.52, (1988. 1) ,p.82- 66
Abstract	
Notes	岩崎英二郎教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00520001-0322">http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00520001-0322</a>

# 鉦夫の言葉

——《Glückauf》の文化史的側面——

柴田陽弘

## (I)

枢密顧問官 Goethe が祝辞を述べている<sup>1)</sup>。郵便局の広間には、ザクセン・ヴァイマル・アイゼナハ公国の主だった人人を初め、市のお歴々が、厳粛な中にも隠しきれない喜びを面に浮かべて居並んでいる。表通りから騒然たる歓呼の声と音楽が響いてくる。演説は佳境に入っている。と、Goethe は絶句してしまう。感動のあまり、とすれば辻褄があうが、今となっては真相を知るのとは不可能である。10分ほども沈黙していた、という説がある。それほどに沈黙が長く感じられたに違いない。人人は私語はもとより、身動きもしない。Goethe の炯炯たる眼光に射すくめられたようにじっとしている。やがて Goethe は話の継ぎ穂を見つける。人人はほっとして聴き入っている。街路では鉦夫たちがパレードで氣勢をあげている。つづいて一同は教会へ移動し、荘重な礼拝式がおこなわれる。さらに全員が、トランペットとティンパニーの轟く中を、緑の樅の若枝で飾られたヨハネス新坑の入口へ行進する。鉦山旗がひらめき、お歴々が坑道の入口をぐるりと取り囲む。鉦山官吏 Schreiber が華奢な造りの鉦山用鶴嘴を差し出し、Goethe がそれで最初の一撃を打ち込む。すると居並ぶ人人の口から期せずして声があがる。Glückauf! Glückauf! Glückauf!

この万歳三唱にどれほどの願いが込められていたかを、今日の我々が体験することは難しい。1784年2月24日のこの日、ヴァイマルから騎馬でおよそ6時間、イルム河流域の小邑イルメナウはお祭り気分で沸きかえていた。ヴァイマル公国の財政を好転させるための切札として、永らく

廃山になっていたイルメナウ鉱山の再開発問題に Goethe たちが取り組んでから、早くも8年が過ぎていた。幾多の困難を乗り越えて、ようやく今、ヨハネス新坑の開設にこぎつけたのである。鉱山が有望であるとの一応の診断が、専門家から下されてはいた。しかし当時の鉱山知識と技術をもってしては、鉱脈の有無は掘ってみなければわからないのである。そのような状況の中で、イルメナウの市民や鉱夫たち、鉱業組合の株主たち、その他の利害関係者が、それぞれの思惑を胸に発した Glückauf を、今日の我が国に理解することは難しいに違いない。坑道には聖人の名が冠されるのが慣例だった。地底の闇の世界へ下るには、神の加護が必要である。坑口は、俗界と神の国との境になる。人人はこの識閥に立つとき、切実な思いを込めてこの言葉を口にした。イルメナウ鉱山ヨハネス新坑に寄せる期待がどれほど大きく、神聖なものであったかは、Goethe の演説からさらに8年後の、Voigt の報告から推量することができる。ヨハネス坑は開設後、実にさまざまな困難に遭遇している。主としてそれは地下水の排水に関するものだったが、1792年9月3日、August 公の誕生日に、ようやく最初の頁岩が搬出されるまでこぎつけられた。イルメナウは全市をあげての祝日になった。

その日は早朝から、新しいフレッツを見て喜ぼうとする人人で、丘の斜面も搬出小屋もあふれていた。そこで私は鉱夫を督励して、今日中に頁岩の桶を搬出させようとした。桶を私は飾りつけさせた。鉄の搬出用ザイルの最下部2ラハターのところにも、花で編んだ飾りをつけさせた。夕方の6時に最初の桶が上ってくるそうだという噂が、町中に行き渡り、大勢の人人を引き寄せたのである。この時間にはすでに夕闇が迫っていたので、堅坑も上から照らされていた。そして搬出が始まった。...お歴々の主だった人人が、堅坑のまわりに円をつくっていた。その背後と搬出小屋の二階には、何百という人人が押しかけていた。鉱夫たちがビールを飲み、音楽を奏でている斜面に、小屋に入りきれなかった群衆がうろろうしていた。それにもかかわらず、小屋の中はおごそかな静寂が支配していた。ゆ

っくりと搬出が始まった。誰をも危険にさらすことなく、とうとう飾りたてられた桶が上ってきた。合図に応じて、トランペット、ティンパニー、大砲、火縄銃、太鼓が歓迎の轟音を響かせた。皆、歓呼し、祝福し合った。絶え間ない轟音にもかかわらず、この光景は感動的だったので、居合わせた者の大部分が涙を流していた。…さて桶がひっくり返され、最初の手押し車の頁岩が斜面を下るはずであったが、小屋から数歩進むのがやっとだった。全員が殺到して、新しいフレッツのひとかけらを持ち帰ろうとしたのである。…つづいてトランペットとティンパニーの轟く中で、大公殿下に万歳が唱えられた。そして打ち上げられた狼煙が、花火の開始を告げた<sup>2)</sup>。

我々は Glückauf の諸相を、さらにいくつかの文学作品から観察することにしよう。まず、Goethe の『Wilhelm Meister の遍歴時代』(1829) 第2巻第9章には、Montan が Wilhelm を連れて山を巡る場面がある。

モンターンはそれから友人を案内して鉱区の中を順序立って廻った。いたる所でぶあいそうな Glück auf! の挨拶を受け、それに彼らは朗かに返礼した。「ぼくは時折」とモンターンは言った。「彼らに Sinn auf! と呼び返したくなるんだ。Sinnの方が Glück よりも上だからね<sup>3)</sup>。

とりあえず我我はいくつかの語を、原語のままに残しておくことにする。語義については、次章で詳しく検討するつもりだからである。ここでは、Glückauf が登場する局面がいかにも多様であるかを見ておくだけに留めたい。もはや Goethe の Glückauf は、地下に隠れた鉱脈を探り出す呪文のたぐいではない。鉱山学の進歩に対応して、組織的に資源を採掘する鉱山業のキー・ワードなのである。

Goethe の実例をいまひとつ挙げよう。『Faust』第2部第1幕の土の神 Gnomen の口上に――

金属をわしらはかためて掘り出すのさ、  
元気に Glückauf! Glückauf! と挨拶しながら<sup>4)</sup>。

Novalis の『Heinrich von Ofterdingen』第1部第5章では、老いたる鉱夫がこの言葉を解説している。この宝掘りがまだ若者だった頃、地下資源の秘密に魅せられて、鉱夫を志し、はるばるボヘミヤの鉱山町オイラへ辛い旅をするところから回想が始まっている。若者は信じられないほどの好奇心と静かな敬虔の念に満ちて、オイラの<sup>ヘルツ</sup>鉱滓の山に立っている。途中で会った黒装束の鉱夫たちは親切で、鎔鉱所の鉱夫長に会うように教えてくれた上、つぎのような忠告をしてくれる。

たぶん君の望みはかなうと思うよ、鉱夫長に話しかけるには、「Glück auf」という慣例の挨拶をするんだよ、と教えてくれました。うれしい期待で一杯になって、私は歩み続け、この新しい、意味深い挨拶を絶えずくりかえして口にしてみました<sup>5)</sup>。

とりあえずここでは、「意味深長な」挨拶であると主人公が述懐していることに注目しておく。この挨拶は、鉱山の基礎知識のひとつとして扱われ、鉱山業そのものを象徴しているのである。鉱夫長の家で一夜を過ごした青年は、早朝の弥撒に臨み、僧の祈禱の言葉に深く心を動かされる。

僧は、鉱夫たちに聖なる加護を賜われますように、危険な仕事に従事するかれらを保護し給い、悪霊の誘惑と奸計から守護し給いて、豊かな採鉱をお恵みくださいますようにと神に祈ったのです。私はこれまでこれほどの熱情をこめて祈ったことも、弥撒の高い意義をこれほど生き生きと感じたこともありませんでした。私の未来の同僚たちは、まるで地底の英雄のように思われました。かれらは幾多の危険に打ち克たなければならず、その驚くべき知識によって羨むに足る幸福も持ち合わせ、自然の息子である太古の岩と、その暗い不思議な部屋で、真剣に黙々と交りながら、神の賜

物を享け、それを俗世とその困窮へ喜んで持ち上げる準備をしているのです。鉱夫長は礼拝が終ると、ランプと小さな木の基督磔刑像をくれ、私を連れて、堅坑と呼び慣わされている地下の坑道へ入る峻しい入口へ向いました<sup>6)</sup>。

青年が鉱夫長について危険な坑道を滑り下りて行くと、先導の灯が自然の隠れた宝庫へ通ずる路を指し示す幸運の星のように閃く。どれほどの敬虔の念をもって、金属の王が岩の割目に細い鉱脈層をなしているのを、青年は見つめたことか。金属の王はまるで幽閉でもされているように、危険を冒し辛苦を重ねて岩盤を破り、自分を日の光の下へ連れ出してくれる鉱夫に向かって親しげに輝いている。こうして宝掘りはオイラに留り、鉱石を掘り出す採掘夫になった。老人がここまで話すと、聴き手たちは陽気に *Glückauf* と唱えて乾杯する<sup>7)</sup>。

上のわずかな引用だけでも、Novalis の「鉱山」がどのようなものであったかは明らかであろう。鉱山業は神から祝福を受けたものであり、これに携わる者ほど神の叡智と摂理への信仰に目覚め、無邪気で純粋な魂を保ちつづける。鉱夫は貧しく生まれ、貧しく死んで行く。鉱夫にとって「商品となった富」など何の魅力もない。地下の「神の懐にいだかれた富」だけが興味の対象となる。これを得ようとする艱難辛苦こそが、鉱夫の官能を新鮮に保ってくれる。鉱夫は僅かな給料を心からの感謝をもって受けとり、毎日生の歓喜に溢れて暗い坑道から出て来る。地下の闇で専ら作業する鉱夫は、生涯にわたって日の光と人間から遠ざかっている。それだけに一層、光と休息の魅力、戸外の空気と景色の有難さを身にしみて知っているのである。こうして鉱夫は、自然の固有の精神と多彩な姿を、最も純粋に、敬虔に味わうことになる。このような神性化された Novalis の「鉱山」のそこここに、*Glückauf* の余韻が響いていることに注目しよう。このモチーフが「鉱山」の意味をさらに深化させているのである<sup>8)</sup>。

実例はまことに多様で枚挙にいとまがない。*Glückauf* をモチーフにした歌謡、詩作品も限りなく多い<sup>9)</sup>。Clemens Brentano は鉱山のモチーフ

を好んで取り上げているが、この鉱夫の言葉も例外ではない。「プラハの草創」では、ボヘミヤの無尽蔵の地下資源とボヘミヤの政体の成立とが、Glückauf によって象徴づけられている。

おお、スラヴの民よ、汝の歩みを始めよ！

回りでは、地底が Glück auf! Glück auf! と歓呼している。

さらに男性合唱で力強く――

Glück auf! Glück auf!

おお、われらに歩みを教えよ。

汝に黄金をお持ちしよう、

あの奈落の太陽を。

銀を上げよう、

地底の満月を。

大地の星、

銅を、鉄を、

日の下へもたらそう。

Glück auf! Glück auf!

これに鉱夫の合唱が和す――

Glück auf! Glück auf!

われらはその歩みに従う、

われらは君主を導きて、

われらは主人を導きて、

家の満月を、

賢者を、英雄を、

帝国の幸運の星を、

鉱山の玉座へ、

地の底から導き上げる、

Glück auf! Glück auf!<sup>10)</sup>

Achim von Arnim も、この鉱夫の挨拶をしばしば取り上げている。泉の掘削に従事する Faust と Berthold を描く「王冠の番人たち」に、異

邦人が登場する。泉の工事現場が倒壊して途方に暮れている折りもあり、Martin Luther の手紙を携えた男が現われる。

煙突掃除人と見紛うばかりの、奇妙な身なりの見知らぬ男だった。おしりに皮の前掛け、黒リンネルの上着、緑の帽子．．．Glück auf とそのよそ者は言い、親しげに握手しながら、手紙を手渡した<sup>11)</sup>。

Arnim は、この異邦人が熟練した鉱夫であることを、Glück auf の挨拶だけで暗示している。かれから泉の掘削に有益な助言を得られるに違いない。前途の希望をこの異装の男に巧みに託していると言えよう。

E. T. A. Hoffmann の「フェールンの鉱山」では、鉱脈を見つけ出す異能者として登場する老鉱夫が、坑道の底で若い鉱夫にこう言っている。

Glück auf!

地底の岩の Elis Fröbom よ!

——さてもご同輩、ここの生活はいかがじゃな<sup>12)</sup>。

Josef von Eichendorff に、この祈り言葉そのままの題名をもつ詩がある。生き埋めから脱出した鉱夫に仮托して、憧憬の力を形象化している<sup>13)</sup>。また別の詩「楽土」で、「魂が Glück auf! と叫んでいる / まわりで陽気に人びとが挨拶する」<sup>14)</sup>と、この言葉の内的な音楽性を表現している。

Franz Grillparzer にも、Glück auf のモチーフがしばしば登場する。一般に流布している歓迎と別離の挨拶<sup>15)</sup>としてばかりでなく、鼓舞し予言する内的な呼びかけの言葉として使われているのである<sup>16)</sup>。

また Heinrich Heine も「ハールツ紀行」で、クラウスタールの鉱山での印象を描写している。

ここで私は気分もよくなった、とりわけ生身の人間のなごりをまた感じたからである。というのは地底に、ほのかな光が現われ、ゆっくりと動いていたためである。坑内燈をもった鉱夫たちが、Glück auf と挨拶しながら



次第に上ってきた。われわれも同じ挨拶を返すと、かれらはそばを違って上っていった。なじみの、静かでもあるが同時に心を悩ます謎に満ちた思い出のように、その深みのある澄んだ目差しで、青年も老人も、坑内燈で神秘に輝いた敬虔でいくらか蒼白い顔を私の方へ向けた。かれら是一日中、暗い寂しい堅坑で働き、今は上の愛しい日の光と妻や子の瞳が恋しくてたまらないのである。…あたかもドイツ的誠実さのように、小さな坑内燈が、さほどまたたくこともなく静かに、確実に、堅坑や坑道の迷宮を導いた。湿っぽい山の闇から抜け出ると、日の光が射していた——Glück auf!<sup>17)</sup>

このほか、ビーダーマイヤー時代においても、現代においても、Glückauf の用例は夥しく、鉱山の領野をはるかに越えた、ひとつの精神世界を形成している点に注目したい。

## (II)

今まであえて日本語に置き直すことを避けてきた Glückauf を、いくつかの独和辞典で調べてみたい。まず『大独和辞典』(博友社 1973 年第 19 版)では、「坑夫の挨拶；ご無事で」とある。『現代独和辞典』(三修社 1987 年第 1251 版)によると、「ご無事で(坑内へ降りるときのあいさつ)」となっている。また『独和大辞典』(小学館 1985 年初版)には、「(入坑する鉱員への)無事を祈るあいさつ」とある。

さらにわれわれは、いくつかの翻訳で、前章に引用した作品の当該箇所を見てみよう。『Faust』で土の精 Gnom たちは「元気で、元気で」と頼もしく挨拶を交している(高橋健二訳 角川文庫 1980 年第 19 版)のだが、別の翻訳では、「ご無事、ご無事」と声かけ合うのである(大山定一訳 人文書院 1967 年重版)。『Wilhelm Meister の遍歴時代』第 2 巻第 9 章は、登張正實訳で「幸を開け」と工夫されている(『ゲーテ全集』第 8 巻 潮出版社 1981 年)。Novalis の『Heinrich von Ofterdingen』の当該箇所を時代順に並べると、「御無<sup>グリュック・アウフ</sup>事<sup>ツク</sup>で」(田中克己訳 第一書房 1936 年)、「御無<sup>グリュック・アウフ</sup>事<sup>ツク</sup>で!」(斎藤久雄訳 共栄書房 1938 年)、「お達者で」(阪本越郎訳

蒼樹社 1947 年), <sup>グリュック・アウフ</sup>「お達者で」(小牧健夫訳 河出書房 1951 年) と二つの系列に分かれている。登張訳を例外として、辞典も翻訳もほぼ定訳として、坑内での安全を祈る挨拶という点で一致している。

それではドイツの辞典ではいかなる説明がなされているか。Wahrig: Deutsches Wörterbuch (1981) には ‚Bergmannsgruß‘ と素気なくあるだけである。Duden: Deutsches Universal Wörterbuch (1983) も、東独の Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache (1977) も同様である。Duden: Das große Wörterbuch der deutschen Sprache (1977) の説明も変りばえしない。Kluge: Etymologisches Wörterbuch (1975) はやや詳しい。「呼び掛け、古形の挨拶 Glück zu に対応するもの。15 世紀の初めから、出会いと別れの挨拶として好まれてきた。1597 年 (Jac. Ayrd. A., Dramen 5, 236 Keller) に初めて、ニュールンベルクで、励ましの Glück が活気づけの auf と並ぶようになる。エールツ山系で、町のギルドの Glück zu から坑夫が分離して、1600 年以降、鉱山の挨拶になる。」

Hermann Paul: Deutsches Wörterbuch (1. Aufl. 1897 5. Aufl. 1966) では、やや簡略に「1600 年に古形の挨拶 Glück zu に対応するものとして、1675 年に初めてエールツ山系で坑夫の挨拶として」と記されている。M. Heyne: Deutsches Wörterbuch (2. Aufl. 1905) はさらに簡潔に、「山男の間で、それから名詞として。》試掘する坑夫たちの勇ましい glück auf« Treitschke」となっている。この用例は言うまでもなく Grimm: Deutsches Wörterbuch (4. Bd. I. Abtlg. 5. T. 1958) の踏襲であろう。ここでは、glück auf が中高ドイツ語の wol úf のように激励の auf を伴って、おそらく glück zu から造られたこと、その中間段階として、広く流布したルターの glück uff とほぼ同時にできた glück auf die reise とか glück auf den weg のような言い廻しがあったことが記されている。まず初めは、一般に幸運を祈ったり、激励したり、挨拶をしたりする言い方として登場する。Grimm には 1621 年の用例から始まって、いくつかの例が挙げられているが、17 世紀と 18 世紀の大部分では、このような用法がごくまれであったという。古典時代に入ってから漸く、鉱夫ことばの影響

で、挨拶語としてしばしば使われるようになる。Goethe, Biedermann, v. Ayrenhoff, Grillparzer, Raabe らの用例が掲げている。別れの挨拶、純然たる祝詞、喜びの表明として用いられたほか、狩人の挨拶としても使われた。17世紀の後半からまずザクセンで、鋳夫の挨拶として、鋳脈の開鑿を暗示して使用された。「glück auff! は鋳夫が互いに交わす挨拶である」(G. Junghans 1680年)「glück zu は鋳夫のものではない。glück auf が鋳夫のものである。glück auff! auff! と言って、glück zu とは言わぬ。鋳夫はこの言い廻しを好まない。かれらはまた glück zu には返礼さえしたがる。しかし glück auff には熱心に返礼する」(Ch. Melzer 1684年)「glück auff! は鋳夫の最も普通の挨拶である。glück zu などと言おうものなら、かれらは大層気を悪くするだろう。割れ目や鋳脈が閉じずに、開か(auffthun)なければならないからである」(Chr. Herttwig 1710年)

Grimm には、さらに Glückauf の項目でかなりの用例が挙げられているが、重複を避けて、ここでは取り上げない。われわれはさらに Glückauf の歴史を、G. Heilfurth に基づいて追うことにしよう<sup>18)</sup>。古来、鋳夫の伝承の中には、挨拶に似ているか、それと同等の機能を持った言葉がいくつもあるが、Glückauf のように鋳山そのものに密着した性格の挨拶はなかったのである。最古の鋳夫の歌「農夫の話」Märe vom Feldbauer (1330-1350?) の中では、鋳夫が別れに、„Got müez iuch bewarn!“ と挨拶している<sup>19)</sup>。鋳山関連文書が豊富になる16世紀には、さまざまな言い廻しが出てくるが、Hans Rudhart のヨアヒムスタール文庫(1523年)には„Gehdyn“とある。すなわち、これは入坑のとき言う„Geht ein“であると解釈されている<sup>20)</sup>。Helmut Wilsdorf によれば、坑内での挨拶は„Gehdinne, gehdeussen, gehdunten, gehduffi“であり、入坑のときは„Hollan!“と言う<sup>21)</sup>。広く普及している„Grüß Gott“とか„Gott grüß Euch“なども、鋳夫たちは使用している。とりわけアルプスではそうである。1511年の謝肉祭劇で坑夫が„Got grueß euch“と切り出すのが、その証拠となる<sup>22)</sup>。16世紀にはすでに Glück の概念が加わって、„Frisch auf mit Glück“のように使われた。„Glück zu“も、Glückauf の導入

されるまでは山で使われていたはずである。

Heilfurth は、J. C. Adelung の „Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart“ (Leipzig 1798) に言及している<sup>23)</sup>。この本の „Nagelprobe“ (杯を飲み干したことを見せること) の項に、飲酒の慣例を記して Glückauf を鉱夫と関連づけた記述があるという。ザクセンの選帝侯 Christian 二世は、ヨーロッパ貴族の中でも殊のほか酒を好む男だったが、その宮廷飲酒マナーによると、「まず一同の健康を祝して飲み、その後で Glück auf! と唱えて、喜ばしき鉱夫を呼び出すのだという。それから、古人はそを腹中に収めたり、と唱えながら Nagelprobe を行う。」19世紀後半の K. W. Wander の „Deutsches Sprichwörterlexikon. Bd. III“ (Leipzig 1873) や Grimm にも、これが取り上げられている。しかし Heilfurth は文献学的には疑わしいとし、17世紀のパロック的戯れか、としている。

それでは最初に Glückauf が鉱夫の生活圏に入ってきたのは、いつどこでなのか。その最も古い典拠のひとつが、1672年の年代記にある。エールツ山系のヨーハンゲオルゲンシュタットの新しい鉱山開鑿の記述で、「選帝侯 Johann Georg 二世公が当地で試掘する坑夫に Glückauf を呈し / 自らも鉱山株を引き受けた。」そのためこれは Glückauf 新坑と名づけられたとある<sup>24)</sup>。はたしてこの挨拶が鉱夫の間に普及していたためなのか、領主の口から出たために命名されたのかは明瞭ではない。しかし鉱夫の生活圏で、この頃まだこの言葉が流布していなかったことが、1670年のマリーエンベルクの結婚式の歌からわかる。それは「結婚の宴の客よ、 Glück auf, Glück auf」という呼び掛けで始まっている<sup>25)</sup>。

つぎにフライベルクで1582年以来、30年戦争中の中断を除いて、毎年催されている Gregorius 祭の1674年のプログラムが重要な典拠となる。この祭では、生徒たちがさまざまな階層と職業の衣装を身につけ、フライベルクの生活に鉱山と鉱夫がどれほど大切かを寓意的に表現する。それは鉱夫の呼び掛けで始まり、呼び掛けで終わっている。Glückauf の象徴的意味が大きく前面に押し出されているのである<sup>26)</sup>。しかしすでにこの時期

に、Glückauf が鉱夫の挨拶として定着していたかどうかは疑わしい。少くとも珍しきゆえの効果を意図したものとは言えるだろう。1656年のプログラムでは「Glück zu, 貴き町よ」となっており、1669年には、選帝侯に Glück zu と呼び掛けている。それゆえ、1669年から1674年までの間に Glückauf が鉱夫の生活に入ってきたことは明らかである。

Glückauf が鉱夫の挨拶として定着したことを証拠立てる最初のもは、Christian Meltzer の学位論文であろう。エールツ山系の鉱夫の生活を詳しく描写した „Glück Auff! DE HERMUNDURORUM METALLURGIA ARGENTARIA. Vom Ertzgebürgischen Silber-Bergkwerck” (1680) がそれである。Meltzer はこれを単なる挨拶語としてではなく、その機能に着目し、エールツ山系の鉱山の象徴語として扱っている。この本はつぎの言葉で結ばれている。„Faxit DEUS feliciter! Velut viri metallici nostra vernacula precantur: Glück auff!“ (神よ、幸せを与え給え。さらば、われらが故郷の流儀で、鉱夫が願うがごとくに、Glück auff!)<sup>27)</sup>

同年の1680年に、フライベルクの Gottfried Junghans が記述しているところによれば<sup>28)</sup>、Glückauf はエールツ山系で、とりわけ儀式に使用されており、一般には1673年の時点でなお „Gott grüß euch“ と挨拶されていた<sup>29)</sup>。フライベルクでは入坑の際に、„Glück auff“ か „GOTT grüße euch“ と言った<sup>30)</sup>。いずれにせよ、この頃に、Glückauf が口語として、エールツ山系の西で使われていたことは疑いがない。

Christian Meltzer の先生だった Andreas Beyer も、その著書の前文で、「Glück auff! 謹啓、読者様」と呼び掛けている<sup>31)</sup>。Joan Eisenhart は鉱山法の著作の中で、鉱夫は独自の挨拶語 Glück auff を使い、一般の Glück zu を聞くのは不吉な前兆と信じられている、と証言している<sup>32)</sup>。

これらの資料から浮び上ってくるのは、1680年頃にはすでに、エールツ山系の鉱夫たちの間にこの挨拶語が普及していたということであり、かつ縁起をかつぐという意味でも、初めは「開く」という意味の auf に魔的な色づけを与えていたということである。すでに流布していた Glück zu に対抗して、意識的に導入された経緯も興味ぶかいが、とりわけその背景

となっている鉱山労働者の文化的、社会的な特殊空間に、Glückauf によって独自の形態を与えようとした意識の総体に興味につきない。

Glückauf は言うまでもなく、二語の構成要素からなる合成語である。,'Glück' はもとより、一般の意味領域をはるかに越えた、鉱夫独得の実存に根ざす特殊な色彩を帯びた言葉である。その生活圏において、この言葉がきわめて重要な意味を担っていることは、今までの概観からも伺うことができるように思われる。学問上の裏づけが貧弱なままに地底へ潜っていくことは、Glück に頼る要素のきわめて高い危険で大胆きまわる行為である。鉱夫特有の気風と敬虔性の生まれる素地はここにある。埋蔵量の豊かさは,'Fundglück' と呼ばれ、古い時代には、Glück と産出量を示す Ausbeute は同義で使われていたほどだった。古来からの迷信で、柳などの二股の若枝で水脈や鉱脈を探り当てる霊力をもった占い棒 Wünschelrute は,'Glücksrut' と呼ばれ、占い屋 Rutengänger はまた,'Glücksruiter' とも称された。豊かな鉱脈を教えてくれる山の霊は,'Glücksmännlein' だった。Meltzer は豊かな産出量の意味で,'Berg-Glück' と言っている<sup>33)</sup>。

鉱山業の忍耐のいる作業や地の闇での勇氣ある行動、鉱脈発見への倦まざる希望や努力、神の恩寵 Glück を切望せざるを得ぬ現実、長い報われない努力の後の思いがけない贈物の喜びなど、きわめて複雑な意識の総体が、鉱夫の歌や種種の文献に反映している。ここでは Matthäus Wieser の例を挙げておこう。

勇氣をふるえ、  
後ろを見せるな、  
敬虔なる者に  
間もなく  
Glück がもたらされるだろう<sup>34)</sup>。

Glück はまたさまざまな品詞に変容する。,'glücklich' ,'zu Glücke gehen' ,'glücken' などはいずれも、豊かな産出量を暗示する。そして地の宝の供給者としての神への帰依は、莊重な宗教性を帯びて読者に迫ってくる。

主が鉱山業に幸をもたらしますように  
豊かな鉱石を育ててくださいますように<sup>35)</sup>。

ここには、鉱石が植物のように成長するという古い信仰が反映している。地中には金属の木が枝を広げていると、長い間信じられてきたのである。神への絶対の信頼と帰属が、多くの文献に反響している。鉱山における Glück の決定的な意味をよく表しているのは、歌や格言の世界だけではない。鉱山や坑道の名におびただしく Glück が冠されていることでも、それは推察できるのである。例えば、Gottes Glück, Gutes Glück, Glücksblüt, Hoffnung zu Glück (以上ザクセン) とか、Glücksgarten, Glücksruthe, St. Jacobs Glück (以上ハールツ) などのように。また人物や場所とも結びついて、Altenauer Glück とか Neue Louisensglück のようにも使われている<sup>36)</sup>。

つぎに ‚auf‘ であるが、本来は「上へ」という方向を示す言葉であったはずである。これが活動を促す鼓舞、激励、伎癢、鞭撻の意味が加わる。そしてさらに、‚zu‘ の反意語としての ‚offen‘ の意味が加味される。‚auftun‘ aufdecken, aufbrechen, aufhauen‘ におけるような、「開く」「開鑿する」の意味合いである。昔の鉱山では埋蔵の予測がつかず、危険な要素が大きかったから、「開く」の意味が大きな比重を占めていた。そしてそこでは、敬虔な信仰が主調をなしていたことは言うまでもない。„Thue dich auf!“ とか „Bergmännischer Gott, tue die Klüfte auf“ のような表現は、それを証明している<sup>37)</sup>。「開けごま Sesam öffne dich」のたぐいの呪文に通底する意識が、そこにあることは否めないであろう。‚auftun‘ や ‚aufschließen‘ が、神への感謝や願望の色合いを帯びて、M. Wieser や Novalis の作品にはしばしば登場する。

そして岩の錠前がすべて  
その宝を開く<sup>38)</sup>。

鼓舞、激励の意味の ‚auf‘ も、用例は限りなくある。Heilfurth によれば、一般に愛唱されている民謡と同じように、鉱夫の歌も、‚Auf‘ ないし

„Auf, auf“ で始まるものがかなりある。そのほかにも, „wach auf“ や „frisch auf“ のような表現を加えれば, その数は相当になるであろう。また „Auf, auf!“ は, 鉱山の現場の掛け声として, 昔の鉱山では実際に使われていた。 „Aufschreyen“ も入坑の呼び声として同様に親しまれていた。それが鉱山の機械化と文明化が進むにつれて, 次第に消えていく。

「地上へ搬出する」の意味での „auf“ の用例も多い。鉱夫にとって, いわば地底からの帰還, 日光の下へ戻ることを意味する „auf“ は, 深い感情を内蔵しているものである。工業化が進んだ現代の鉱業では, „auf“ の, „öffnen“ としての意味が後退して, むしろ „aufwärts“, „empor“, „nach oben“ の比重が強まっていることは否めない。しばしば宗教的色彩を帯びる「地上へ」の切なる願いを, つぎに挙げておく。「私」とは鉱夫に刻を告げる鐘である。

上へ, 上へ, 私は地底へ呼びかける,  
私は, 私は上において。  
地底へ下りるたび,  
君らは地上を考えよ<sup>39)</sup>。

以上, 時代によって微妙に変遷をとげながらも, **Glückauf** が多様な意識の重層構造を成しており, 鉱夫という仕事の特異性を反映して, 一般の挨拶と隔絶した独自の内容を持つに到った経緯について, 若干の考察を試みた。**Glückauf** の諸相についてはまだまだ言及すべき点が多いが, ここではひとまず, この言葉に凝縮されたヨーロッパ文化の一斑に触れるにとどめておく。文学作品においても, この歴史を背景にして, 単なる挨拶の言葉としてばかりでなく, 鉱山業のみならず, ヨーロッパ精神世界の象徴としての形象を獲得していることに意義があるのである。



注

- 1) Goethe. Die Schriften zur Naturwissenschaft. Leopoldina-Ausgabe Erste Abteilung Erster Band S. 63 ff. Abgek. LA I-1 S. 63 ff.
- 2) LA I-1 S. 15 ff. S. 32 ff. S. 85 ff. S. 115 f. S. 168 ff. S. 178 ff. S. 196 ff. S. 297 ff. S. 219 ff. Otfried Wagenbreth: Goethe und der Ilmenauer Bergbau. Weimar 1983 S. 63 ff.
- 3) Goethe Werke. Hamburger Ausgabe Band 8 S. 263 Abgek. HA 8. Bd. S. 263.
- 4) HA 3. Bd. S. 181 Z. 5852-5854.
- 5) Novalis Schriften. Stuttgart 1977 1. Bd. S. 240 f.
- 6) Novalis Schriften. a.a.O. S. 241.
- 7) Novalis Schriften. a.a.O. S. 242 f.
- 8) Novalis Schriften. a.a.O. S. 244 f.
- 9) Gerhard Heilfurth: Das Bergmannslied. Kassel u. Basel 1954. Georg Schreiber: Der Bergbau in Geschichte, Ethos und Sakralkultur. Köln u. Opladen 1962. Gerhard Heilfurth: Glückauf! Essen 1958. Gerhard Heilfurth: Bergbau und Bergmann in der deutschsprachigen Sagenüberlieferung Mitteleuropas. Bd. I Marburg 1967. Gerhard Heilfurth: Der Bergbau und seine Kultur. Zürich 1981. etc.
- 10) Clemens Brentano: Die Gründung Prags. Werke hrsg. v. Otto Brechler u. August Sauer. München u. Leipzig 1910 10. Bd. S. 81 u. S. 279.
- 11) Achim von Arnim: Sämtliche Werke hrsg. v. Wilhelm Grimm. Berlin 1840 2. Bd. S. 290 f.
- 12) E.T.A. Hoffmann: Die Bergwerke von Falun. Sämtliche Werke hrsg. v. E. Grisebach, Leipzig 1900 6. Bd. S. 168 ff.
- 13) Josef von Eichendorff: Werke hrsg. v. Richard Dietze, Leipzig u. Wien 1891. Bd. I S. 283.
- 14) Ebda. S. 15.
- 15) Franz Grillparzer: Werke hrsg. v. Stefan Hock, Berlin-Leipzig-Wien-Stuttgart 1911 7. Bd. S. 64, 5. Bd. S. 211.
- 16) Ebda. 6. Bd. S. 42 u. 7. Bd. S. 50
- 17) Heinrich Heine: Werke hrsg. v. Erwin Kalischer u. Raimund Pissin, Berlin-Leipzig-Wien-Stuttgart 1907/08 7. Teil S. 37.
- 18) Gerhard Heilfurth: Glückauf! Essen 1958.
- 19) Franz Kirnbauer u. K. L. Schubert: Die Märe vom Feldbauer. Wien 1955.
- 20) Helmut Wilsdorf: Georg Agricola und seine Zeit. Berlin 1956, S. 178.
- 21) H. Wilsdorf: a.a.O S. 178.
- 22) Leopold Schmidt: Volksschauspiel der Bergleute. Wien 1957, S. 11.

- 23) G. Heilfurth: a.a.O. S. 31 f.
- 24) Johann Christian Engelschall: Beschreibung der Exulanten- und Bergstadt Johann-Georgen-Stadt. Leipzig 1723, S. 254.
- 25) G. Heilfurth: a.a.O. S. 34 f.
- 26) G. Heilfurth: a.a.O. S. 36 f.
- 27) Christian Meltzer: Glück Auff. 2. Aufl. Leipzig 1690, letzte Seite.
- 28) In: Außgeklaubte Gräublein Ertz. Das ist Zusammengetragene Bergleufft-ige Wörter und Redens-Arten / Erkläret Von Gottfried Junghansen. Freiberg 1680, S. C iii.
- 29) Christian Berward: Interpres phraseologiae metallurgicae. Frankfurt 1673, S. 41.
- 30) G. Junghans: Unterirdische und unentbehrliche Arbeit. Das Edle Bergwerck zusambt denen darbey bräuchlichen Terminis oder Wörtern. Freiberg o. J. 1690, letzte Seite.
- 31) Andreas Beyer: Der christliche Bergmann oder Bergmännische Christie. Leipzig 1681.
- 32) Joan Eisenhart: De regali metallifodinarum argentaria. 2. Aufl. Leipzig 1690, S. 31.
- 33) Christian Meltzer: Historia Schneebergensis Renovata. 1716.
- 34) G. Heilfurth: Bergmannslied S. 380.
- 35) G. Heilfurth: a.a.O. S. 582.
- 36) G. Heilfurth: Glückauf! S. 18-25.
- 37) Chr. Schindler: Ephphata verbum Christi metallicum. Zwickau 1655. Mitteilungen der Freiburger Altertumsvereins (1923) H. 54, S. 29.
- 38) G. Heilfurth: Bergmannslied S. 388.
- 39) G. Heilfurth: Glückauf! S. 30. u. S. 25-30.